

平成16年度食品流通改善巡回点検指導事業(農産物安全対策業務)による調査点検結果の概要

1 調査の目的

我が国の農産物の栽培農家における農薬の使用状況及び産地段階における農産物への農薬の残留状況を把握し、農薬のリスク管理に係る施策の企画立案のための基礎資料を得るとともに、調査結果に基づく所要の指導を通じて、農薬の不適正使用の防止を図り、農産物の安全性の確保を図る。

2 使用状況調査

(1) 調査方法

農産物販売農家3,881戸を対象として、地方農政事務所等が農薬使用記録簿を配布し、農家に農薬の使用状況を記帳してもらい、農産物の出荷時期に農薬使用記録簿を回収した。農薬使用記録簿に記帳された内容を基に、使用された農薬の適用農作物、使用量又は希釈倍数、使用時期及び使用回数に不適正な事例がないか確認を行った。

(2) 調査結果(別表1)

不適正使用のあった農家

調査対象とした3,881戸の農産物販売農家のうち29戸の農家において、何らかの不適正な使用が認められた。

不適正使用が多く認められた作物

不適正な使用が認められた農家数の割合が高かった農作物は、はくさい、ぶどう及びブロッコリーであった。

使用できない作物への不適正な使用の事例

農薬登録上適用がない農作物に対して農薬を使用した農家が5件あった。いずれの事例においても、ラベルに表示された適用農作物の確認を行わず農薬を使用したことが原因であった。特に、ブロッコリーの4件については、従来からの慣行で使用しており、農薬使用基準に対する認識不足が認められた。

使用量又は希釈倍数が不適正であった事例

ア ラベルの確認不足により、規定された希釈倍数よりも濃い濃度で使用した農家が2件あった。

イ 従来からの慣行によりボルドー液を調整したため、規定された希釈倍数よりも濃い濃度で使用した農家が2件あった。

ウ 農薬の効果に対する不安から規定された希釈倍数よりも濃い濃度で使用した農家が1件あった。

使用時期が不適正であった事例

ア ラベルの確認不足又は誤認により、規定された使用時期を誤った農家が2件あった。

イ 農薬使用後の経過日数を確認せずに農作物を収穫し、出荷した農家が6件、経過日数の起算日を誤った農家が1件あった。これら7件のいずれの事例においても、使用時期が「収穫21日前」以上とされている農薬であり、さらに6件は「収穫30日前」以上の農薬であり、

使用から収穫までの日数が長く設定されている場合ほど違反しやすくなる傾向がみられた。

使用回数が不適正であった事例

ア 同一の病害虫に対して、同一の農薬を繰り返し使用し、有効成分の総使用回数を超過した農家が3件あった。

イ 同一の有効成分を含有する農薬を数種類使用し、有効成分の総使用回数を超過した農家が8件あった。

(3) 不適正な使用のあった農家数・割合等の推移

不適正な使用のあった農家数で集計を始めた平成15年度と平成16年度の比較を以下に示した(使用量又は希釈倍数については、平成15年度においては集計していないため平成16年度のみ示した)。この結果、不適正な使用のあった農家数は、適用農作物、使用時期及び使用回数のいずれにおいても減少していた。

調査年度	調査農家数	農薬の 総使用回数	不適正使用の あった農家数	不適正使用のあった農家のうち			
				誤った作物に 使用した農家数	誤った使用量 又は希釈倍数で 使用した農家数	誤った時期に 使用した農家数	誤った回数で 使用した農家数
平成15年度	3,820	26,599	80 (2.1%)	25 (0.7%)	-	21 (0.5%)	43 (1.1%)
16	3,881	32,704	29 (0.7%)	5 (0.1%)	5 (0.1%)	9 (0.2%)	11 (0.3%)

(4) 指導状況

不適正使用のあった29戸の農家に対し、地方農政事務所等及び都道府県が農薬の適正使用の徹底を図るよう指導した。

今回の調査結果を都道府県に通知するとともに、農家等使用者に対してあらためて農薬の適正使用の周知徹底を図るよう要請した。

3 農薬残留状況調査

(1) 調査方法

調査対象農産物(試料点数)

ア 野菜及び果実(558)

えだまめ(10)、キャベツ(99)、きゅうり(24)、さやいんげん(2)、だいこん(115)、はくさい(73)、ピーマン(24)、ブロッコリー(42)、みずな(5)、メロン(7)、レタス(30)、かき(2)、日本なし(6)、はっさく(2)、ぶどう(49)、みかん(41)、もも(22)、りんご(5)

イ 茶(124)

サンプリング方法

農産物販売農家数を勘案して都道府県ごとの試料点数を配分し、使用状況調査を実施した農家のうち、試料の提供及び残留農薬の調査実施の了解を得た農家が生産した出荷段階の農産物から、無作為に5個以上かつ合計重量が2kg以上（茶については、荒茶200g以上）となるよう採取し、分析用試料とした。

分析方法

ア 野菜及び果実

（ア）多成分一斉分析法

磨砕均一化した試料からアセトニトリルで抽出した溶液を濃縮及び精製したものを分析用溶液とし、ガスクロマトグラフ-質量分析計（GC-MS）又はフォトダイオードアレイ検出器付き高速液体クロマトグラフ（HPLC-PDA）を用いて分析した。

（イ）アセフェート、オキサミル及びメタミドホス試験法

アセフェート、オキサミル及びメタミドホスについては、「食品に残留する農薬、飼料添加物又は動物用医薬品の成分である物質の試験法」（平成16年1月24日付け食安発第124001号厚生労働省医薬食品局安全部長通知）の別添の第2章の12及び16に定められた各農薬の試験法を用いて分析した。

（ウ）カルボスルファン試験法

カルボスルファンについては、「農薬取締法第3条第1項第4号から第7号までに掲げる場合に該当するかどうかの基準を定める等の件第1号イの環境大臣の定める基準」（昭和48年環境庁告示第46号）の2の（129）に定められたカルボスルファン試験法を用いて分析した。

イ 茶

試料に100の水を加え5分間抽出した溶液を濃縮及び精製したものを分析用溶液とし、GC-MS又はHPLC-PDAを用いて分析した。

分析対象農薬及び定量限界

別表2 参照

（2）調査結果

野菜及び果実（別表3）

分析の結果、558点の試料のうち、定量限界以上の農薬が定量された試料は、合計131点であったが、残留農薬基準又は登録保留基準を超過する事例は認められなかった。

なお、キャベツに使用できない農薬であるフェニトロチオン（MEP）及びだいこんに使用できない農薬であるプロシミドンが検出された試料が各1点あったため、当該キャベツ及びだいこんの生産段階における農薬の使用状況等を調査した結果、周辺ほ場における農薬使用に伴う飛散が原因と考えられた。

茶

分析の結果、124点の試料すべてについて、定量限界以上の農薬は定量されなかった。